参考

・「植木屋」（抄）　梅崎春生　新潮社　昭和四十八（初出・昭和三十一）

「旦那。こいつはいい庭になりますぜ。ようがす。あっしに任しておくんなさい」

「庭？」

庭をつくるなんて思いもよらなかったし、そんな趣味も全然なかったし、彼はびっくりした声を出した。

「ええ、庭ですよ。この空地は地味と言い、広さと言い――」

「おいおい」と彼はさえぎった。「こんな猫の額のような――」

「いや、広けりゃ広いし、狭けりゃ狭いで、ちゃんとやり方があるんでさ」植木屋は自信あり気に断定した。「あっしなんかには、このくらいの広さが手頃でさ。ようがす。ひとつあっしが身を入れることにしましょう」

「おいおい、早合点しちゃ困るよ。まだ庭をつくるとも何とも――」

彼も下駄をつっかけて庭へ降り、そのでこぼこの空地を踏みしめながら、そう言いかけて振り返った時、もうその植木屋の姿は濡れ縁には見えなかった。早呑み込みして、さっさと退散して行ったものらしい。その日はそれで済んだ。

それから四五日して彼が会社から戻ってくると、留守番の婆さんがあたふたと彼に報告した。

「何だかへんな人が来て、庭に樹を植えて行きましたよ」

「植木屋だろう」

彼は濡れ縁に出て見た。庭のまんなかにぽつんと椿の木がつっ立っている。へんてつもない恰好の椿であった。

「困った奴だなあ」彼は嘆息し、そして婆さんに言いつけた。「今度僕の留守にやってきたらだな、勝手に樹を植えたり庭をつくったりしても、代金の方の責任は負わないぞって、そう言っといて呉れ」

また一週間ばかり経った。彼が会社から戻って来ると、椿に並んで百日紅が植えられ、庭の隅には孟宗竹と南天が植えられていた。彼は婆さんを呼びつけて訪ねた。

「代金の責任は持たないと、植木屋に言って呉れたかね？」

「言いましたとも」婆さんは口をとがらせて答えた。「そうしたら、お代の方は心配なく、なんて言ってましたよ。ある時払いで結構だって」

「ある時払い？」彼は庭を眺めながらおうむ返しに言った。庭に植えられた樹々は、ひとつひとつを見れば一応の恰好をしているが、こう並んでみると妙に不調和な感じがした。眺めているだけでも面白くない気分になってくるので、彼は早々に鑑賞を切り上げて濡れ縁を退散した。

また四五日目に松と柿が植えられ、次にはザクロと紅葉が植えられた。ザクロは赤く割れた実を点じていた。また一週間も経つと、ラカン槇に梅に沈丁花があたらしく姿をあらわした。どしどし樹が殖えて行くので、彼は面白くもあり、また気味悪くもあって、下駄をつっかけて庭に降り、樹をひとつひとつ点検して廻った。最初四五本の時は不調和だったが、こんなに沢山になると何

か雑然とした面白さが出て来るようでもあった。彼は嘆息して、婆さんに冗談を言った。

「植木屋の奴、僕のうちに森林でもつくるつもりかな」

婆さんは聞えなかったのか、ぶすっと横を向いて返事をしなかった。

（中略）

次の日曜日の夕方、彼が茶の間に寝そべっていると、濡れ縁の方からとぼけたような声がした。

「旦那。旦那」

見ると腹がけどんぶり姿の男が立っている。見覚えのあるような、ないような、ぼんやりした漢字の男であった。

「旦那はザクロの実を食べたね」

それで植木屋だと判った。

「食べたよ」と彼は答えた。

「いけないね。ザクロなんか食べちゃいけないねえ」

「いけないか」

「いけないよ。ザクロは食うもんじゃねえ。あれは眺めるもんだ」

「そうか」彼は頭をかいた。「あんまり旨そうだったからな。じゃもうザクロを食うのはよそう。柿にしよう。」

「柿？」

植木屋はぎくりと棒立ちになったようだった。そして何を思ったか、そのまま彼の視界をふらふらっと横に切れた。

濡れ縁に出て見ると、もう植木屋の姿はどこにも見えなかった。庭には雑然と樹々がむらがり立っているだけであった。

「おかしな植木屋だな」彼はひとりごとを言った。「まるでイタチみたいだよ」

次の日勤めから戻ってきて庭に立ち、樹群を眺めているうち、彼はふっと柿の木が見当たらないのに気がついた。あわてて見廻すと、ザクロも忽然と姿を消していた。彼は大声で婆さんを呼んだ。

「婆さん、婆さん。ここに生えていた柿とザクロはどうしたね？」

「今日の昼、植木屋さんが掘り起して運んで行きましたよ」

「運んで行った？」植木屋に詰め寄るつもりで彼は婆さんに詰め寄った。「どういうわけで運んだ？　何か言ってたか？」

「へえ。ザクロや柿はこの庭にはあまり似合わないんだってさ」

そして婆さんはぼやくように言葉をつづけた。「ほんとにいけすかない植木屋たちだよ。植えたかと思うと運んで行くし、いっこうに落着きがない」

「運んで行ったのは、それじゃこれが初めてじゃないのか？」

「そうですよ」婆さんはぼったりとうなずいた。「入れかわり立ちかわりだから、庭の掃除もたいへんだねえ」

彼は何か言おうとしたが、すぐ思い直して下駄をつっかけ、庭に出た。小森林をなす庭樹のかずかずの、そのひとつひとつを調べて行くと、そう言えば最初の日に植えられた椿や百日紅の姿はなく、その跡には青桐が枝をひろげていたり、孟宗竹が茂っていたところには泰山木がぬっとつっ立っていたりして、彼をおどろかせた。（何でまた俺はうっかりしていたのだろう）朝夕ただぼんやりと庭樹を眺め、眺めるだけで済ましていたのだが、それの内容が次々変化しているとは今まで全く気がつかなかった。